

なっている、次の例を考えてみるとよい。「小さな弟をぶったあのちびっこのことを先生に知らせるなんて、なんて良い娘なの！ 私はあるあなたのことを誇りに思うわ！」他の潜在可能性は悪いこととみなされ、それらを開花させることは積極的に禁止され、罰せられる。「弟をぶったあの男の子をぶつなんて、あなたは悪い娘ね！ そんなことをしてはだめじゃない！ 良い娘はそんなこととはしないものよ！ そんなことをしたら、あなたを愛することができると思ってる？ 部屋に戻りなさい！」

「正常」と自己文化の成員であること

「正常」になること、自己文化の一人前の成員になるということは、選択的な形成、是認された（「自然な」「信心深い」「礼儀正しい」「公民的な」）潜在能力の発達、否認された（「邪悪な」「犯罪的な」「非行的な」「無礼な」）潜在能力の禁止を伴う。社会規範を内面化することなく、それらに従って役割演技だけすることは、理論的には可能であるが、しかしこれはほとんどの人にとっては困難である。文化の観点から見れば、もしあなたの日常的な心——習慣的な、自動化したあなたの考え、感じ方——が、文化の合意的信念および価値を反映するように形作られれば、ずっと望ましい。そうすれば、あなたは自動的に適切な知覚と解釈を経験し、したがって、周囲にみんなの社会的強制媒体もなくても、文化的に適切な仕方で行動することが「自然」になるであろう。あなたが自動的に考え、行動し、「正常」と感じる時、あなたの心の内的な仕組みが自己文化の価値や信念のほとんどを自動的に繰り返す（まねる）時には、あなたは文化的な合意的トランスを成し遂げたのである。この一組の連動的信念は、「われわれは「信念体系」を持っていない」という信念を含んでいる。外国人たちは

奇妙な「信念」を持っているが、しかしわれわれは何が正しいのか知っているのだ！

文化というものは、ほとんどの場合、決してその成員が文化に疑義を呈することを奨励しない。われわれの歴史のほとんどの期間、あまりにも多くの人々にとって、物質的存続は不安定きまわりなものであったので、自文化が荒々しい世界の中でわれわれを生かし続けてくれたという根深い感覚が——暗黙にはあれ——ある。疑義を呈してはならない、ポートを揺らしたりしてはならない。文化は閉鎖系であらうとするのである。

とはいえ、聡明な多くの人々は、個人的な経験を通じて、自分たちの文化的価値のいくつかの相対性を実感するようになった。過去においては、多く旅し、他のあらゆる人が「野蛮人」あるいは「異邦人」であるわけではないことを見るための率直さを持った人々は、このことを学ぶことができた。われわれの時代は、文化の相対性についての膨大な量の人類学的資料が利用できるようになり、そのため、旅をしなくても、はるかに容易にこの実感が得られるという点で、独特である。この種の自己観察——これについては後で詳しく論じる——はまた、われわれの文化の限界を超越するのを助けることができる、とグルジェフは教えた。

エッセンス 本質

グルジェフは新生児のことを、純粋な本質 *essence* として特徴づけた。本質とは、あなたの真実の、もつとも深い自己、あなたの願望、趣味、好き嫌い、潜在能力であり、合意的トランス誘導手順がそれらを修正し始める以前のあなたに本来備わっているものである。本質とは、われわれがこの

世界にやって来た時の、われわれの眞の姿なのである。

明らかになれわれは、新生児としての限られた範囲の能力（レバートリー）を持っている。われわれの特徴は、よく眠る子または気まぐれに眠る子だとか、おむね満足しているまたはじれったがるとか、ある一定の味を好み他は嫌うといったことを含んでいる。本質はまた、正常になる全ての人々においては、言語を学び、文化を吸収する能力を含む。しかし、われわれはタ、ブラ、ラ、サ——われわれをならん尊重することなく、文化が望むように書き込むことができる、何も書かれていない石板——ではない。われわれはまた、成長するにつれて発現し始めるであろう、独特の遺伝的および精神的・靈的資質を持つており、したがってわれわれは、たとえば、体育を嫌い、森を歩くことを好んだり、ニンジンの味はむかつくほど嫌いだ、汗の匂いが好きだったり、詩は楽しむが数学にはうんざりだったり、他人にひやかされるにもかかわらず、内なる光を求めたりするかもしれない。

合意的トランス誘導とは、赤ん坊——被験者——の行動と意識が「正常」になるように形作り、すべての人々の内面での行動と意識の高いレベルの標準化が実現され、それによって彼らが社会的規範に確実に適合するようにさせるプロセスである。アメリカ人であるためには、あなたは良い英語を話し、あなたの文化に特有の種類のほどよく丁寧なマナーを身に付け、通りを横断する前に左右両方向に注意を払い、両親と教師を敬い、アメリカ国旗に敬意を表さなければならぬ、などなど——ここに、あなたのお気に入りの五千の信念や態度を付け加えられたい。

もちろん、われわれ文化的催眠術師たちは、自分たちがすることを合意的トランス誘導とは思っていない。われわれのほとんどは、生気を少なくし、現実との接触を減ずることを伴うという、茫然自失状態に似たトランスを誘導するという考えにぞっとするであろう。われわれは、自分たちが子ども

たちにして、「教育」、彼らが幸せな生活を送るために持たなければならぬ技能を教えることだと、真面目に考えている。われわれは子どもたちを助けているのであって、トランス状態に誘導しているのではない！で、これはもちろん、多くの点で本当である。たとえば、子どもは横断する前に左右両方向に注意することを学ばなければならぬ。さもなければ、傑き殺されるかもしれないから。ちょうど普通の催眠術師が正式の催眠的トランスに誘導するために真実（あなたの視覚はほんやりしつとあり、ターゲットの回りの色に変化しているのが見える）を利用したように、文化的催眠術師は合意的トランスに誘導するのに多くの真実を利用する。

合意的トランス誘導において、本質——基本的・本質的なあなた——に何が起こるのだろうか？

トランスの本質の抑圧

もしあなたが非常に幸運で、あなたの本質の特徴のほとんどが、あなたの文化の中でたまたま尊重されているものであるなら、合意的トランスの誘導はとてもスムーズで、葛藤を免れる。あなたの成人生活は、多分「正常で」、首尾よくいくであろう。たとえば、もしあなたの本質が短気で攻撃的な時、あなたがたまたま屈強で誇り高い戦士を賞賛する文化の中に生まれたとしたら、あなたはその種の世界で生きることの現実的な結末に対処しなければならないかもしれないが、しかし自分が正常かどうかについて思い悩むことはない。仮にあなたの本質は短気で攻撃的なのだが、あなたがたまたま、女性は従順で従属的だと思われる文化の中で女に生まれたとしよう。あなたの気性が表に出ると、あなたは多くのごたごたに巻き込まれるかもしれない。

この後者の例でなお悪いことには、あなたの本質ナッセンスのそうした側面は、その外面的な表出が抑圧されるまで、多分否認され、罰せられるであろう。あなたは、成人の女として、従順かつ従属的に振る舞い、内面でそのように思うべく努めるだろう。自分は善良な人間であり、正常な人間だ、と自分に言い聞かせるであろう。他の人々はあなたのことを正常だと言い、友人として受け入れ、かくしてあなたの従順な振る舞いを強化し、善良であるというあなたの気持を強化するであろう。が、内面では、何か——あなたの本質ナッセンスの一部——が押しつぶされたのだ。もしそれが非常に徹底的に押しつぶされ、したがってあなたがその短気を感じることにさえなければ、何かがおかしい、自分は幸せであるはずなのに、あまり幸せだと感じられないという、曖昧な感じを抱くだけかもしれない。あなたの生氣、あなたの本質的なエネルギーの一部が、合意的トランスの維持に充てられることで失われてしまったのである。

もし抑圧がそれほど徹底的でなかったら、あなたはたくさんの方があなたを腹立たしくさせるのがわかるのが、しかしあなたはその怒りを表現できないか、または表現しようとせず、そこであなたは悩む可能性がある。「私は正常なのだろうか？ 私は物事をこのように感じることはない。正常な女性はこうした状況によって取り乱したりしないものだわ」。あなたの本質的なエネルギーの一部は混乱に陥ることによって失われたのであり、一部は自分が正常ではないことについて「神経症的」に悩むことへと向かう。再び、あなたはなにがしかの生氣を失ったのである。

さて、われわれはここで、合意的トランス誘導と正式の催眠的トランス誘導との比較対照を始めることができる。

文化的催眠のための仕掛けと準備

われわれの典型的な催眠手順の仕掛けを思い起こしてみよう。スタンフォード被催眠性スケールは、比較的普通の仕掛け——静かな部屋とゆったりした椅子——の中で施与される。催眠術がかかれるという考えが、仕掛けと手順に若干の魅力を付加するのだが、通常の科学的な仕掛けは控えめで、魅力を宣伝しない。催眠術師は、被験者よりいくぶん年とっているか、または威厳があり、「専門家」であるかもしれないが、しかし催眠的關係は基本的に正常で、有能な、二人の同意した成人間の關係なのである。

通常の催眠誘導に対する制約

はつきりと論じられてはいないかもしれないが、催眠に対する明らかな制約がある。たとえば、

- (a) 時間制限があり、通常一時間ないし二時間以内。
- (b) 被験者は、催眠術師によってなんらかの現実的な仕方ではじめられたり、脅されたり、危害を加えられたりすることは予期しない。
- (c) 催眠術があまりうまくかからなくても、催眠術師は被験者を咎めたりしない。
- (d) 催眠術がうまくかからず、深い「トランス」を起こさせないが、しかし被験者は、その効果は一時的なものにすぎず、自分がその経験によって基本的に変えられることはな

いだらうと予期する。

基本的に、正式の催眠誘導は、科学的または教育的理由のために引き受けられる、同意した成人間の自発的で制限された関係である。被験者によつて催眠術師に与えられる力は、時間および前記の他の深い倫理的制約によつて制限される。経験の深甚なる変化がしばらくの間起こるかもしれないが、しかし彼の人格または彼の現実のいかなる根本的あるいは長期的な変化も被験者によつて予期されることはない。

合意的トランス誘導は、通常の催眠誘導において与えられるよりもはるかに大きな力と影響を文化的催眠術師たちに与える、そういう条件の中で始まる。

合意的トランス誘導の不随意的性質

第一に、合意的トランス誘導は、同意した、見識ある二人の成人間の自発的で制限された関係として始まるのではない。それは誕生と共に始まる。新生児は、未熟な身体と神経系を持つてこの世界にやつて来て、まさにその存続それ自体ならびにその幸福のため、全面的に両親に依存する。学習することへの一種の自然な同意はあるのだが、しかし力関係がその同意に強い強制的な性質を付与する。

子どもは意識および自分自身の要求を満たす能力を徐々に身に付けていくであろうが、その一方で、力関係は長年の間非常にアンバランスのままであるだろう。事実、力のバランスは、成人間のそれというよりはもつとはるかに、われわれが神話の中で想像し発展させたもの——神々と単なる死す

べき人間との間の力のバランス——に似ている。両親およびその他の文化の媒体——催眠術師——は、被験者に比べて相対的に全知・全能である。かくして、合意的トランス誘導のための仕掛けは、普通の催眠誘導の場合よりもはるかに大きな催眠術師側の力を伴うのである。

合意的トランス誘導のための無制限の時間

第二に、合意的トランス誘導は一時間のセッションに制限されない。それは、何年間もの反復的誘導と、以前の誘導効果の強化を伴うのだ。子どもたちが時間を経験する仕方を仮定すれば、文化的催眠術師たちは永久に彼らの被験者たちに働きかけなければならない。さらに、合意的トランスは一生続くことを目論まれている。あなたに目覚めるための暗示を与えるべく待機している文化的催眠術師などいないのである。

本書は目覚めるための暗示である。この暗示を与えることができないほど文化の力が強くはないことを、私はとても喜んでいる。

身体的な力の行使

第三に、普通の催眠術師は、催眠術にかけられるプロセスに協力するよう被験者を説得するために力を行使することはできない。事実、それは普通の仕掛けでは逆効果になるであろう。これに反して、文化的催眠術師は、必要に応じて身体的な脅しを行使することができ、必要な場合、平手打ち、

尻叩き、殴打、特権の取消し、またはおもちゃの没収などによってそれを現実化する。被験者の側にある罰や苦痛への怖れは、彼を文化的催眠術師の願望に非常に敏感にさせ、望まれた仕方ですばやく行動させるようにする。文化的には是認された仕方で行動するためのもっとも容易なやり方は、内面でのように感じることで、罰への怖れは、内的な心的・感情的プロセスを文化的には是認された仕方構築することを助ける。

感情的な力の行使

文化的催眠術師は身体的な脅しと罰に制限されない。両親は被験者にとって愛と自尊心の主たる源なので、彼らは被験者に愛と承認を与えることを控えると言つて脅すかもしれないし、実際に従順さが示されるまでそれを与えることを控える。「そんな不潔な子は愛してあげられないよ！」子どもたちが親に抱く自然な愛を操作することは、これのもう一つのバリエーションである。「ママのことを愛しているなら、そんなことはほしえないはずよ！」子ども自身の知覚と感情の否認と結びつけられた、愛のこの条件付きの行使（もし……だったら、あなたのことを愛する）は、単純な体罰よりはるかに大きな影響を及ぼす、と多くの心理学者たちが感じてきた。愛と愛情は非常に真実で不可欠なものであるが故に、それらは格別に強力な操作手段になるのだ。ほとんどの親子関係にかくも多くの真の愛があるという事実が、合意的トランス誘導の助けとなる混乱をつのらせる。いつ行動は操作的で、いつそれはまさしく愛なのだろうか？

適口への褒美としての愛と承認

第四に、文化的催眠術師は、従順な行動への褒美として愛と個人的承認を与えることができる。「なんて素敵な考えをする子でしよう。良い娘だこと。あなたを愛しているわよ!」「全部Aだつて! なんて頭が良い子なんでしょう!」 普通の催眠術師も承認を与えることはできる(「よくやっていますよ」)が、しかしその承認が両親からの愛と承認が子どもに対して持ったような効能を持つことは滅多にない。

合意的トランス誘導の個人的承認という側面は、非常に重要である。われわれは皆「社会的本能」、他の人々に受け容れられたい、友だちを持ちたい、社会での居場所を得たい、尊敬されたい、「正常」でいたいといった願いを持っている。早い年齢では、この受容と承認はほとんどもっぱら親によつて媒介される。正常であるということはどういう意味かを、両親が定めるのである。子どもが他の成人および子どもたち(彼らもまた文化の媒体の役を果たす)との社会的関係を確立していくにつれて、彼は受け容れられるにはどのように行動しなければならぬかについてより多く学んでいく。これらの是認された行動習慣が確立され、報いられるにつれて、それらはさらに心的機能の習慣的パターンを構築していく。拒絶への怖れは、強力な動機づけ要因である。われわれの全ては、多分、自分が「正常」かどうかについて幼少期に思い悩んだ記憶をそれなりに持っている。

罪悪感

第五に、被験者——子ども——は、文化的に望まれている仕方で行動しそこなうと明らかに途方に暮れる。「良い娘は宿題をするものです！」宿題をしないことによって、あなたは悪い娘になるのだ。誰も自分が悪いと思われれることは好きではないので、文化的催眠術師を喜ばすことのほうが普通の催眠術師を喜ばすことよりずっと重要なのである。われわれは実に多くの仕方で否認され、あまりにもしばしば悪い子だと言われるので、一般的な無価値感や罪悪感が容易に築き上げられるのである。新たな非難や否認がこの蓄積された罪悪感を引きずり出し、新しい出来事に、それが元々持っている以上の力を与える。これが、順に、根底にある不適応および罪悪の感情をさらに助長する。原罪の起源神話が、事態をさらに悪化させる。

解離

合意的トランス誘導に大きな力を与えるもう一つの要因は、幼い子どもの精神状態が、重要な点で、深く催眠術にかけられた被験者の精神状態に似ていることである。これが文化的催眠術師による「暗示」の力を増大させるのである。

たとえば、深い催眠状態では、合意的現実志向(CRO)は背景に消え去ってしまふ。特定の経験が暗示される時、暗示とその結果としての経験は、他の心的プロセスからの相対的孤立の中で起こる。催眠術師があなたの手は重いと暗示をかける時、正常な腕のプロセスと社会的状況についての

以前の一群の知識が直ちにぱっと頭に浮かんで、暗示からエネルギーを取り去ったりはしない。

われわれの通常の状態では、入ってくる刺激と以前の知識とのとてつもない量の自動的な連合がある。何かが起こると、この、あらゆる種類の関連知識の自動的な連合が、その状況にどう対処したらいいかをあなたが決めるのを助けてくれる。たとえば、あなたが通りを歩いている時、一人の男性があなたに話しかけ始めるとする。あなたは、彼の衣服の風変わりさ、奇妙な言葉の発音の仕方、おかしな目つきに気づく。見たところそれについて慎重に考えることなく、あなたはその男性が「狂人」だと「即座に認識する」。あなたの蓄積された、文化的に承認された知識が、狂人には関わらないようあなたが告げるので、あなたは彼から注意をそらして歩き去る。状況を脅威的あるいは不快だとあなたが認識することを可能にしたこうした一瞬の連合がなければ、あなたはこの「狂人」とのごたごたに「巻き込まれ」たかもしれない。それから起こったかもしれないことを誰が推測できるだろう？

この種の連合はあまりにも自動的なので、われわれは、普通、それに気づかない。連合 association の浸透度合いと重要性をわれわれに実感させるには、解離 dissociation に注視することが必要である。子どもの精神状態は、CRO がしばしば相対的に不活発になっている、深く催眠術にかかった被験者のそれに似ている。彼は自動的に心に浮かぶ他の情報をあまり持っておらず、また連合プロセスも、進行中の出来事を常により広い文脈（情況）の中に置くほど自動化されてはいない。そのため、文化的催眠術師の暗示は、その力を増大させる、解離した、連合のない状態で働くのである。

われわれの早い時期の文化適応と条件づけの多くは、われわれが多くの言語を身に付ける前に起こる。言語は情報を連合させるわれわれの能力を著しく高めるので、おそらくこの言語の欠如が子ども

の心の解離した性質にさらに寄与するのではないかと私は推測している。成人として、圧倒的に言

業によって考える者としてのわれわれが自分たちの文化適応と条件づけを理解しようと試みると、言語の形でそれが記憶に保存されていないので、思い出すことは困難である。このことがさらに、初期の文化適応の力を増すのである。

親への本能的信頼

深い催眠状態の被験者は、特に催眠状態が年齢退行次元に沿って深ければ、それまでに催眠術師に相当な信頼を寄せるようになっていく。事実、この信頼は魔術的な力を帯びている。なぜなら、催眠術師が起るだろうと言っただけで、何か驚くべきことが起こったからである。子どもたちは、親に対してそれに似た深い信頼を寄せる。初めのほうで記したように、親はしばしば子どもにとっては全知・全能に思われるので、この深い信頼は魔術的な性質を持ち、被験者／子どもをさらに暗示にかかりやすくする。

永続性への期待

最後に、そしてもっとも重要なことは、合意的トランスは厳密に時間制限がある単に興味深い経験というよりはむしろ、永続的であることが期待されているということである。生涯の精神的、感情的、身体的習慣は、われわれが傷つきやすく、暗示にかかりやすい幼少期の間に形成される。これらの習慣の多くは単に修得されるだけでなく、条件づけられる。すなわち、条件づけが持つあの強制

的な性質を持つているのだ。それらは自動化した習慣なので、正式の催眠が普通必要とするような特に定められた状況の支持を必要としない。ほぼすべての環境において働くことができるのである。あなたは、もはや、合意的トランスを維持すべく努める必要はない。それは自動的なのである。

とても大切だと教えられたことが、自分が生まれ落ちた特定の部族の古風で風変わりな観念にすぎず、必ずしも普遍的な真理ではない、ということを見抜くことのできた一人の個人をわれわれは想像することができる。が、われわれのほとんどは、自分の内部に誘導された合意的トランスの中心についてそのように見ることはできない。あまりにも多くの点で、われわれはそのトランスそのものである。

合意的トランスの誘導

次にわれわれは、文化的催眠術師の側の、普通の催眠術師が望むことができるよりはるかに多くの力、知識、力量および洗練した技巧でもって、合意的トランス誘導を開始する。文化的催眠術師は「無邪気さの力」も持っている。自分自身が陥っている合意的トランスに気づいておらず、単に自分のことを「自然に」行動しているとみなしているのである。子ども——被験者——は、あまり知識がなく、存続、愛、幸福、承認について、心から文化的催眠術師に依存している。そのプロセスが一生続くトランスを誘導するとしても、少しも不思議ではない。

文化的トランス誘導は、いくつかの主要な暗示群から成り、その各々がさまざまな形で何度も何度も繰り返される。言われたとおりにしないと罰が与えられることはもちろん、もしあなたが本当にそ

うしようと努め、もしあなたが善良なら、言われたとおりにできるはずだという暗示をかけられる。従順さへの褒美として、愛、満足、承認が与えられる。

「良々」の基渾

主要な暗示群の一つは、その土地の文化が「良い」とみなす潜在可能性を発達させることに関わっている。「おまえは（堅気な）お隣さんの息子と仲良くやっつけていくことができる」「おまえは数学を覚えることができる。それを楽しんでやろうとさえすべきだ。出世するにはそれが必要なんだよ」「おじさんに親切にしないで。たとえおまえがそうは思わなくても、おじさんはおまえのことが本当は好きなんだよ」。文化が尊重する潜在可能性を発達させると、それに対して直ちに報いが与えられる。人が望みうるあらゆるもの——全ての幸福——は、これらの潜在可能性を発達させることによって、正常になることによって、手に入れることができる。暗にあるいははっきりと文化は約束する。われわれのもっともわかりやすい例はアメリカン・ドリームである——誰でも一生懸命働けば百万長者になれる。

逸脱した思考や行動の抑圧

二番目の主要な暗示群の焦点は、まずその文化が「悪い」とみなす諸々の思考や感情を行動に出すこと、次にそれらを内面的に経験すること、を抑圧することに置かれる。たとえば、「先生に口答え

したりしてはいけない！」「人に大声で呼びかけるのは失礼だ（悪いことだ）」「普通の人は、自分たちの相違について理性的に話し、わめいたりしないものだ」「先生はおまえのことを本当にじじめていいるのではないのだから、頭にくる理由などないんだよ」「自制心を身につけるとは立派な子だ。前よりずっと利口になったね」。多くの合意的トランスの暗示のねらいは、承認されていない、または知られていないタイプの内的経験が少しも起こらないように抑圧することである。「ジョニー、昨晚、部屋で変な男を見たそうだが、それが現実だったとどんなにお前が思おうと、それはただの夢だったんだよ」「それは単におまえの想像だったんだよ」「ちゃんとした女の子は決して……のこと考えたりしないものだよ」。

義務感を生み出す

三番目の主要な暗示群の焦点は、文化的規範への義務感を生み出すことに置かれる。「私たちはアメリカ人であることを誇りに思う！」「大きくなったら、何になりたいと思っているんだね？ お医者さんかな？」「ごみ収集人になろうと思うほうが気楽にちがいないが、年を取るにつれて、弁護士や実業家といった本当に重要な人間になりたくなるかもしれないよ」。文化は、人生を安全で、意義深く、生きがいあるものにすることで面目を施す。そのお返しに、あなたはその肯定的な価値および偏見を信じ、受け入れるようにならねばならないのである。

われわれの文化は、宇宙が冷たい、敵意に満ちた場所であると考えられる傾向がある。そこで文化が、この敵意に満ちた宇宙からわれわれを保護してくれるもの、われわれの唯一の希望になる。かくして

われわれは、文化を守るといふ、ごく自然に思われる義務を負うのである。

そしてわれわれは、もちろん、自分たちが最高だと教えられる。あなたが最高である時、他の文化は、せいぜい風変わりでおもしろいもの、最悪の場合は非人間的あるいは邪悪なものとして退けられてしまいかもしれない。特に、それら他文化の行動があなたの文化的所与（規定の事実、当然のこと）に対する疑いをあなたに抱かせるような場合には。

許可されていないあらゆることは禁止される

権威主義的な組織や文化をからかうためのことわざがある。「許可されていないあらゆることは禁止される！ 許可されているあらゆることは義務である！」 あいにくこれは、いろいろな点で、全ての文化において本当である。われわれにとって幸運なことに、文化によって知られていないので、文化が決して禁止しようと思わないさまざまな可能性があり、そして代替的な生き方および経験の仕方、それらが禁止されているという事実にもかかわらず試し続けている、不適応者と真に成熟した人々がいる。本質もまた生き、成長することを望んでおり、文化の制約にもかかわらず成長しようと努めるであろう。このことに、われわれの文化がこの急速な変化の時代における不一致や矛盾であふれているという事実を加えてみるとよい。そうすれば、用意ができた精神が見出すためのたくさんの「裂け目」が出てくるのだ。

催眠的トランス現象と合意的トランス現象の相似

前章で論じた催眠的トランス現象と、日常的意識、合意的トランスの現象とのいくつかの相似点を検証してみよう。

自動化した身体の動き

目を閉じ、手を下げ、両手を離すという催眠現象は、自動化した身体の動きの三つの例である。これらの催眠現象の共通の特徴は、身体の動きについての心的イメージ（心象）が催眠術師の暗示によって創り出され、それから、それに対応した動きが被験者の身体に自動的に起こるということである。キーワードは自動的、である。被験者は、これらのことを随意的に行っているように経験してはいない。彼の目および手は、あたかもそれ自身の意志を持っているかのように、被験者が単に受動的な観客であるかのように、不随意的に閉じ、または動くのである。

一見したところでは、これらは異様な現象のように思われる。日常生活では、われわれの身体はひとりでに動くことはなく、われわれが動かそうと思う時にだけ、われわれの身体は動く。それとも？ 「個人的間隔」を保つという行動現象を考えてみよう。カリフォルニア大学デイヴィス校の心理学者ロバート・サマーらは、人々は自分の周囲に半意識的または無意識的な空間感覚を持ち、他人がその空間に進入すると落ち着かなくなる、ということを明らかにした。たとえば、人々は会話のためにお互いに一定の距離を置く。もし一方が近づけば、他方は後ずさりする。この行動は、普通、完全に

無意識的で、自動化しており、意識的な注意を要しない。身体は、それを意識に告げるべく気にかけることなく、適切な距離をただ維持する。文化的催眠術師は、結局、「(相手が親友か恋人であって、状況が抱擁として定義されるものでないかぎり)、正常な人はXフィート離れるものだ。あなたは正常でありたいと思っている」と暗示をかけているのである。

もちろん、それは、多分、それほどはつきりとは暗示されなかったであろうが。子どもたちは、生来、模倣するものである。われわれは、親たちが他人から(自動的に)保っていた間隔を見ていたのだ。人々が近づきすぎると退くのを見ていたのだ。多分、大きくなった時、あまりにも近づきすぎて罰せられたことがあったのだ。われわれは模倣したのである。われわれの模倣はおそらく最初は意識的だったのだが、しかしそれは急速に意識から消えていき、自動化したのである。今や、われわれは、自動的に人々から「自然な」距離を置いて立つようになる。それは「自然」に感じられるが、しかし、実に多くの合意的トランスの行動と同様、きわめて人為的なものである。

これは自動化した行為のちよつとした例である。ほとんどの場合、個人的間隔を保つという行動は、人々の注意をそれに向けさせ、自分自身を観察するよう求めることによつて、容易に意識できるようになるからである。けれども、意識的行動が自動化する時、とりわけ、その行動と結びついた不快な感情的経験があった場合は、それを再び意識するのは困難かもしれない。たとえば、一人の少年がしばしば父親に抱きついたり、まともわりついたりすることで、「弱虫のくつつきや」と呼ばれたとしよう。その場合、「接近しすぎ」ババに愛されない」という無意識的な等式ができるかもしれないのである。

「適切な」対人間の距離についての定義が相違する異文化の成員同士が係わりあうと、その結果、

興味深い状況が起こる。一般的に、南欧人は、会話の際、アメリカ人よりも相手により接近して立つ。カクテル・パーティーでアメリカ人に話しかけている南欧人が、時々、部屋のこちらからあちらまで、アメリカ人を徐々に後ずさりさせているのが見かけられるかもしれない。アメリカ人は圧倒されていると感じるのかもしれない——彼は「正常な」距離を取ろうとしているのである。南欧人は拒絶されていると感じるのかもしれない——彼もまた「正常な」距離を取ろうとしているのである。環境に強いられて、適切な距離についての文化的ルールが意識に上るかもしれない。けれども、もし「接近しすぎ」パバに愛されない」という無意識の等式が働いていれば、距離についての文化的ルールは意識に上らないかもしれない。それらのルールは、父に愛してもらえないことを自分が怖れていたことをアメリカ人に思い出させる危険を持っているからである。彼の心はなにか都合の良い合理化を持ち出すかもしれない。「ヨーロッパ人というのは押し強い人間たちだ。僕に不快感を与えているのはこの男の人格パーソナリティなのだ」。

個人的間隔を取るこうした行動は、催眠的暗示に似た特徴を持っている。あまりにも近くまたはあまりにも遠くに立っている誰かの刺激は、その距離を正すため、心の中の無意識の、条件づけられた、自動化した部分を活動させる。

われわれの動きはすっかり自動化している、とグルジェフは述べた。われわれは一定の数の特徴的な動き、身振り、姿勢、適切な個人的間隔などについての定義を持っており、その各々が、それらを引き出す一定の状況や副人格サブパーソナリティに合わせられる。副人格については、後の章で検証することにした。